

令和3年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団	
施 設 名	京都コンサートホール	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業	
内 定 額 (総 額)	26,700	(千円)
	公 演 事 業	22,821 (千円)
	人 材 養 成 事 業	3,879 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	0 (千円)

(1) 令和3年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	KCH 的クラシック音楽の ススメ Vol.2「The Rev Saxophone Quartet」	2022年2月19日	演目：M.ラヴェル：クーブランの墓 他 出演：The Rev Saxophone Quartet	目標値	350
		アンサンブルホールムラタ		実績値	353※
2	第25回京都の秋 音楽祭 開会記念コンサート	2021年9月12日	演目：サン＝サーンス：交響曲第3番「オルガン付き」他、出演：大友直人（指揮）、京都市交響楽団 他	目標値	1,550
		大ホール		実績値	1,354
3	ラヴェルが幻視したワルツ	2021年10月2日	演目：ラヴェル：ラ・ヴァルス 他、出演：伊東信宏（レクチャー）、三輪郁（ピアノ）、三ツ石潤司（ピアノ・作曲） 他	目標値	400
		アンサンブルホールムラタ		実績値	333
4	京都コンサートホール presents 「兵士の物語」	2021年10月16日	演目：ストラヴィンスキー：兵士の物語、出演：広上淳一（指揮）、茂山あきら（朗読）、芝内もゆる（ヴァイオリン） 他	目標値	400
		アンサンブルホールムラタ		実績値	331
5	オピッツ・プレイズ・ブラームス	2021年11月13日	演目：ブラームス：ピアノ五重奏曲 他、出演：ゲルハルト・オピッツ（ピアノ）、クアルテット湊標（弦楽四重奏）	目標値	490
		アンサンブルホールムラタ		実績値	438
6	京都コンサートホール× 京都市交響楽団プロジェクトVol.2「ショパン！ ショパン！！ショパン！！！！」	2021年11月20日	演目：ショパン：アンダンテ・スピナーートと華麗なる大ポロネーズ、ピアノ協奏曲第1番・第2番、出演：デリック・イノウエ（指揮）、ニューニュー・福間洸太郎・實川風（ピアノ）、京都市交響楽団	目標値	1,300
		大ホール		実績値	1,303
7	ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団 京都公演	2021年11月21日	演目：チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番 他、出演：ヴァレリー・ゲルギエフ（指揮）、藤田真央（ピアノ） 他 新型コロナウイルス感染症の影響により中止	目標値	1,500
		大ホール		実績値	— ※
8	古典芸能で辿る 義経・弁慶旅の追憶	2021年11月23日	演目：橋弁慶・大薩摩・船弁慶・勤進帳 他、出演：杵屋勝七郎（スーパーヴァイザー）、演出、長唄三味線） 他	目標値	400
		アンサンブルホールムラタ		実績値	271
9	3つの時代を巡る楽器物語 第3章「J.S.バッハとミー トケ」	2022年2月12日	演目：J.S.バッハ：ゴルトベルク変奏曲、出演：濱田あや（チェンバロ）	目標値	490
		アンサンブルホールムラタ		実績値	251※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和3年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	第10回 関西の音楽大学 オーケストラ・フェスティバル IN 京都コンサートホール	2021年9月19日	演目：ベートーヴェン：交響曲第7番、ドヴォルザーク：交響曲第9番 出演：秋山和慶（指揮）、関西の音楽大学・芸術大学8校による管弦楽	目標値	入場者数 1,200名・参加者数およそ200名
		大ホール		実績値	入場者数 778名・参加者数 100名※
2	第17回 京都市ジュニア オーケストラコンサート	2022年1月30日	演目：チャイコフスキー：幻想序曲「ロメオとジュリエット」、ラフマニノフ：交響曲第2番 他 出演：広上淳一（指揮）、京都市ジュニアオーケストラ	目標値	入場者数 1,400名・参加者数118名
		大ホール		実績値	入場者数 1,074名・参加者数109名

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>2021年、当ホールは運営方針を「音楽文化の継承・創造・発信の場として、市民・音楽家・ホールが互いに支え・育み合う“文化芸術の拠点”となる」と定め、それに従って次の4つのミッション（①京都ならではの事業を創造・発信する場となる、②あらゆる人々のために、音楽芸術を享受できる機会をつくる、③多様な連携・協働を可能とする、京都におけるクラシック音楽のハブ機能を強化する、④文化芸術面における『京都』の存在価値を高める事業を発信する）を掲げた。その上で、3つのビジョン（①多様な事業を企画制作し、市民や音楽家に求められる公共ホールを目指す、②地域の文化芸術拠点・中間支援組織としての機能を強化する、③安定的・継続的なホール運営を行い、財団全体の組織力を高める）を示した。助成を受けた公演事業（1～9）及び、人材養成事業（1～2）はそれぞれ、ビジョン1及び2の内容と紐づけて企画を行い、事業運営を行った。</p> <p>概ね当初の予定通り、事業を実施することができた。特に、公演事業3、4、5に関しては『The Power of Music～いまこそ、音楽の力を～』という一つのコンサート・シリーズとして制作を行い、2021年5月19日に記者発表を行い全国的に広く周知を行った。その結果、「コロナ禍における音楽の力」に着目した多くのマスコミに記事として取り上げられ、大きな話題を呼んだ（SPICE（5月25日）、音楽の友（7月号）、モーストリー・クラシック（8月号）、関西音楽新聞（8月号）、山陰中央新報（7月11日）、京都新聞（8月19日朝刊）、毎日新聞（9月1日夕刊）、日本経済新聞（9月24日夕刊）、朝日新聞（9月25日夕刊）等に掲載）。</p> <p>しかしながら、2020年度から引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた事業もあった。事業番号1では、プロとアマチュア音楽家の文化的交流を目的として、公演前日に市内の中学校・高等学校において吹奏楽クリニックを予定していたが、まん延防止等重点措置が発令されていたため、中止せざるを得なかった。また、事業番号7は、継続的な水際対策強化のため、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団が入国できず、開催中止となった。さらに、事業番号9においても同様の理由のため、フランス人奏者の入国が叶わなかった（日本人奏者の代役を立てて実施）。人材養成事業1では、各参加大学間で協議を行った結果、学生や聴衆の安全を確保するため、予定していた公開リハーサルを取りやめ、入場者数を半分に絞ってチケット販売を行った。</p> <p>このように、当初の予定から大幅に変更せざるを得なかった事業もあるが、当初の事業目的や目標を崩すことのない代替案を提示した上で、可能な限り事業実施を行ったことで、ホールに課せられた社会的役割は担うことができたと考える。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>京都市が2020年6月に発表した報告書「京都市の芸術家等の活動状況に関するアンケート調査結果について」には、新型コロナウイルス感染症拡大を受け、京都市内で活動する文化芸術に関わる人々や団体が置かれている状況や活動について調査した結果が掲載されている。そこには、コロナ禍における活動継続の困難や発表場所・収入の著しい減少など、芸術家が置かれている厳しい現実が明らかとなった。この結果をふまえ、当ホールでは、京都市交響楽団を起用した事業や（公演事業2、6）、京都ゆかりの音楽家や若手音楽家を起用した事業（公演事業3、4、5、人材養成事業1、2）、関西で音楽を学ぶ学生や京都市ジュニアオーケストラの活動支援を行う事業（人材養成事業1、2）を実施し、例年以上にコロナ禍で苦しむ地元の音楽家の活動の場づくりに励んできた。本助成を受けたことにより、事業内容が一層充実した上に、京都市内で活動する音楽家の活動支援にもなった。次年度以降も、地域の中核劇場としての社会的使命を意識した事業づくりに取り組んでいきたい。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

令和3年度の公演事業及び人材養成事業において、昨年度に引き続き、定性的・定量的データをバランスよく取得できるように目標・指標の設定を行った。しかしながら昨年度と同様、事業によっては新型コロナウイルス感染症の影響があったため、根拠となるデータや実績の明示が難しいケースも見られる。

【公演事業】

目標①～③の指標として、以下の通り定量・定性的データの収集・分析を行った（開催公演のみ）。

目標①の指標（京都市交響楽団や地元京都の音楽家を起用した事業を6以上実施する）⇒5公演実施した。

目標②の指標（国内外の著名な音楽家と地元の音楽家間における文化的交流を意図した事業を4以上実施する）⇒4公演実施した。（国内外の音楽家と地域住民との文化的交流を意図した関連事業を2以上実施する）⇒3公演実施した。目標③の指標（各事業において鑑賞者数と鑑賞者の満足度を測定。鑑賞者数70%以上、鑑賞者の満足度80%以上を目指す）⇒実施した8事業の平均鑑賞者数は67.5%であった。70%に達しなかった理由としては、まん延防止等重点措置が長期にわたって発令され、客足が遠のいたことが考えられる。鑑賞者の満足度は、「大変よかった」「よかった」を合わせると、平均して92%の満足度を得ることができた。

その結果、目標①⇒事業2, 3, 4, 5, 6で達成できた（事業7はコロナの影響により中止）。

目標②⇒事業1, 2, 3, 4, 5で達成できた。しかしながら、当初予定していた事業7及び9については、水際対策強化のためオーケストラ／アーティストの入国が叶わず開催中止／奏者交代及び公開レッスン中止となった。また、事業1の吹奏楽クリニックについては当初教育機関で実施する予定であったが、まん延防止等重点措置が発令されていたため中止となり、一般のアマチュアグループでの実施となった。目標③⇒事業7を除く全ての事業で達成できた。

【人材養成事業】

目標①～③の指標として、以下の通り定量・定性的データの収集及び分析を行った。

目標①の指標（地域（広くは関西地方）で音楽を学ぶ若者を起用し、彼らが積極的に参加できる事業を継続して実施する）⇒事業1では10回目となるコンサートを、事業2では17回目となるコンサートを実施した。

目標②の指標（申請する2事業において、地域住民との文化的交流を行う場を必ず創出する）⇒前述のように、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、文化的交流の場を創出することができなかった。

（事業参加者と来場者にアンケート調査を行い、満足度を測る）⇒事業参加者数の平均は2事業でおおよそ150名。68%のアンケート回収率で、そのうち81%が「今後も事業に参加したい」と回答した（回答権のある者のみ）。来場者アンケートについては、事業1では69%のアンケート回収率で、そのうち93%が「大変よかった」「よかった」を選択した。事業2については、アンケートの回収率が3%に満たなかったため、分析が困難な数字となった。これは、感染症拡大防止のためにウェブ上のアンケートにした結果であると考えられる。令和4年度は紙媒体のアンケートにできないか、慎重に検討を行っていきたい。

目標③の指標（申請する2事業において、多様な教育機関や団体等との連携・協働を必ず行う）⇒事業1では関西の音楽大学・芸術大学8校と連携・協働を行ったほか、ジュニアオーケストラ、音楽高校、音楽大学・芸術大学等の子ども・生徒・学生たちを招待するなど、連携を行った。事業2では、市内の文化会館と連携・協働し、練習を行ったほか、京都市交響楽団楽団員の指導を受けた。ゆえに、目標は達成することができた。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

公演事業・人材養成事業において、前年度または前々年度から企画立案をし、企画制作ミーティングにおいて運営計画を綿密に立てた。いずれの事業においても、以下のスケジュール計画を行い、運営を行ってきた。

前年度の秋まで：企画立案⇒前年度3月：記者発表⇒公演の半年前：チラシ制作、広報スタート⇒公演の4ヶ月前：チケット発売⇒公演の1ヶ月前まで：広報や広告宣伝

公演事業1, 7, 9を除く全ての事業において、事業期間は適切であり、当初の計画通りに進んだと言える。公演事業1については、当初は7月19日で予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大のおそれがあったため、4月1日の時点で日程変更を行い、2月19日に実施した。「(2) 有効性」の項目でもすでに述べたことではあるが、公演前日に市内の教育機関で予定をしていた吹奏楽クリニックが中止となり、急遽、市内で活動を行う一般のアマチュア合奏団でクリニックを行った。また、公演事業7についても繰り返し述べた通り、7月21日の時点で公演中止が決定したため、当初の計画通りに進めることはできなかった。公演事業9については、12月24日の時点で出演予定であったバンジャマン・アラールの入国困難が判明し、急遽、日本人奏者の濱田あやに変更して公演開催を行った。同時にプログラムの変更も行ったため、当初の予定から大きな変更が生じたが、演奏会を実施する目的や概要を変更することなく開催することができた。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

いずれの事業においても、無駄を省き、最小のコストで事業を実施できるよう、予算目論見作成の時点から綿密な計画を立てた。また、事業内容の確実な進行及び経費の厳密な管理に努めた。

開催中止となった公演事業7については、開催予定日の3ヶ月前に中止が決定したため、チラシのデザイン費が発生したが、最小限の出費に抑えることができた。

その他の事業については、開催できたものの、前年度に引き続き、経費面においても新型コロナウイルス感染症の影響を受けた。一年を通して、緊急事態宣言あるいはまん延防止等重点措置が長期にわたって発令されていたため、コロナ前に比べると客足は遠のき、発令が解除となった後においてもホールに賑わいがなかなか戻ってこない状況が続いた。また、人材養成事業1においては、学生及び関係者、観客の安全を確保するため、入場者数を半数にした上でチケット販売を行う必要があった。

また、海外旅行者の来場を見込んで企画した公演事業8については、水際対策強化のため、日本在住の聴衆のみの来場となった。ゆえに、当初見込んでいたチケット収入のおよそ60%の売れ行きとなってしまった。さらに、公演事業9について、フランス人奏者の来日が叶わなかったため、すでにチケットを購入していた奏者のファンからのチケット払い戻し希望が相次ぎ、計画していたチケット収入を得ることができなかった。

コロナ禍において柔軟な対応ができた一方、収入面においては大きな影響を受けてしまった。予算目論見作成時に、リスク幅をより大きく見積もるべきであった。リスクヘッジについては再度協議を行いたい。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

令和3年度においては、2022年3月まで京都市交響楽団第13代常任指揮者兼芸術顧問を務め、当ホールの館長でもある指揮者の広上淳一（キーパーソン）と、企画制作の責任者であるホールプロデューサー（キーパーソン）による共同企画『The Power of Music～いまこそ、音楽の力を～』という4つのコンサート・シリーズを開催した（うち、3公演【公演事業3, 4, 5】が助成対象事業）。

これらの事業のテーマは「音楽の力」であり、2020年以降、新型コロナウイルス感染症の影響を受けたクラシック音楽業界をなんとか元気づけようという一心で、音楽の力をアピールできるような内容を企画した。特に、20世紀に起きた2つの世界大戦やスペイン風邪のパンデミックなど、当時の厳しい歴史的背景に影響を受けて創作された作品を取り上げることにより、「どのような過酷な状況においても芸術は決して滅びない」ということを地域の文化拠点としてアピールすることが目的であった。結果、「(1) 妥当性」でもすでに述べたように、様々なメディアに取り上げられ、全国的に大きな注目を集めることとなった。コロナ禍で多くの人々が疲弊する中、公共ホールとして文化芸術の力をあらためて問うことができたことは、大きな意味があったと考える。

また、当初は海外観光客に京都の文化力を発信するために企画した公演事業8では、コロナ禍において図らずも我が国の伝統文化の素晴らしさを日本国民に訴える事業となった。加えて、伝統文化の中でも普段は交わることのない能／狂言と長唄、加えてコントラバスやアコーディオン、二胡といった異分野の音楽を融合することにより、伝統文化の新たな形を見出すことができた。

さらに、公演事業3, 4, 5で行ったプロの音楽家と地元の若手音楽家の文化的交流の場の創出、人材養成事業1で行った関西の音楽大学・芸術大学の交流コンサート、人材養成事業2で行った市内の子どもたちに対する音楽的教育の場の提供は、地域の文化拠点である当ホールにしかできない、事業展開であっただろう。

今後も「京都のクラシック音楽の拠点」としての機能を最大限に発揮することのできる、優れた事業を行っていきたい。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

当ホールでは、助成を受けて実施した事業が地域の文化芸術の発展につながったかどうかを把握するため、全ての事業においてアンケート調査を行っている。令和2年度は感染症拡大防止策の一貫として、これまで紙媒体で実施していたアンケートをウェブに切り替えたことにより、アンケートの回収率が大幅に低下してしまった。令和3年度については、比較的感染状況が落ち着いていたため、ウェブでのアンケート調査に加え、紙媒体でのアンケート調査も同時に行った。そのことにより、令和2年度のアンケート回収率（5%未満）に比較すると、令和3年度については大幅にアップした（10公演平均 15.5%）。アンケート結果については「(2)有効性」でもすでに述べたが、いずれの公演においても「大変よかった」「よかった」を選択した聴衆は9割を超えていることから、事業を実施したことにより地域の実演芸術の振興に一役買ったことが認められる。

さらに、当ホールではホール会員制度（京都コンサートホール・ロームシアター京都 club 会員制度）賛助会員制度（京都コンサートホール・ロームシアター京都 スペシャル・パートナー制度）を設けており、会員に対して月に1回「コンサートガイド」や「会員通信」を送付するほか、当ホールの主催事業のリハーサル見学やバックステージツアー等を行った。会員には地域住民や地元企業が多く登録しているため、このことにより、地域住民との交流がより一層深まったと言えるだろう。

また、当ホールでは、ホームページやSNS アカウント等を通して情報発信を行うことにより、地域の実演芸術の振興をアピールするよう努めてきた。月に1度実施される、当財団の定例会では「京都コンサートホールウェブサイトアクセス状況レポート」を作成し、その効果の度合いを全職員と共有するよう心がけてきた。助成をいただいた事業については、聴衆の関心度も高く、公演間近になると公演ページのアクセス数が伸びていたことがこのレポートから分かった。助成を頂戴したことにより事業の質が高まり、聴衆からの注目度アップにつながった。よって、これらの事業は地域の文化芸術の発展につながったと言っても過言ではないだろう。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

当ホールでは 2019 年度より、PDCA サイクルを取り入れており、企画立案書・企画書の作成（Plan）から運営（D）、事業チェックシートの作成（C）、チェックした内容の見直し（A）を行うことにより、円滑な事業運営を推進してきた。各事業には主担当・副担当を配置し、チーム全体で事業を運営している。

現在、当ホールの主催事業を企画立案・運営する「事業企画課」には、7 名のスタッフ（正職員 3 名、嘱託職員 4 名）が在籍している。企画課の統括を行うと共に専門的知識を有するホールプロデューサー（企画課長）を中心に、企画制作チームが 5 名（経理や広報担当含む）、チケット担当が 1 名（他課と兼職）で構成されており、月に 2～3 度実施するミーティングでは、一年を通して事業の進捗状況の共有や事業運営のブラッシュアップ等を行ってきた。これらのことから、助成を受けた事業を通じて、課内での活動が持続的に発展したと言えるだろう。

現在、当ホールは、事業企画課のほかに経理や人事等を担う総務課、施設管理等を行う管理課で組織されており、事業を実施するには全組織が適切に機能する必要がある。そういった組織活動を持続的に発展させていくため、当財団では一年かけて「中期経営計画 2023」の策定に関する協議を定期的に行ってきた。この計画書には、当財団が向こう 4 年にわたり取り組むべき課題が記載されており、今後も中長期的かつ多角的な面において組織全体が継続的に発展していくよう、全職員がそのような意識を持って日々の仕事に取り組んでいる。